

荒谷 卓(あらや たかし)  
生年月日:昭和34年秋田県出身  
略歴:昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。  
海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房  
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>



# 日本の戦闘者

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
代表: 荒谷 卓



俺は、20歳の頃に「鹿島神流」と出会い、それ以降、日本の戦闘者としての道の探求は「鹿島神流」とともにある。

日本の武術は多くの流派があり、また明治以降は武士階級が廃止され武術は禁止、帯刀ができなくなってしまったので、元来総合武術であったものが剣術、槍術、杖術、体術等と細分化されちまった。さらには、中国の武芸を日本的に解釈した空手や少林寺拳法なども日本武術としている。しかし、その源流をたどれば、大体は鹿島神宮の神官「国摩真人」(西暦483~498、真人の官職に在る)を始祖とする鹿島七流にたどり着く。「鹿島神流」はその一つの流派である。

俺が、「鹿島神流」を自らの武の道としたのには大きく二つの理由がある。一つは、「鹿島神流」を伝承した国井家の歴史。もう一つは、「鹿島神流」第18代宗家「国井善弥」の生様である。

まずは、「鹿島神流」を伝承した国井家の歴史について説明しよう。鹿島神宮の神官「国摩真人」は、御祭神「武甕槌神(タケミカヅチノカミ)」の神武「節霊(フツノミタマ)」を形に顕し「神妙剣」を創造した。この剣は「天下御しろしめす天皇の側室」つまり天皇の「まつりごと」を助けるための剣である。国井家は、歴代この剣の目的を良く護ってきた。南北朝時代以降、多くの武芸諸流派が足利や徳川等武家の権力におもねり、將軍から流派のお墨付きをもらった時代に、独り尊皇の立場を貫き地下に潜り大衆を助け幕府転覆を目指した。由比正雪の乱などがその一つである。明治に入り、ようやく天皇親政になるや、国井善弥の祖父国井新作は、西南戦争に抜刀隊として出陣し獅子奮迅の功績をあげた。こうした国井家の報国精神を国井善弥は「大義を重んじ、包容同化の精神を培養し、たとえ敵対者に対しても、日ごろ練磨した術技によって己を全うし、相手方の非を是正するところに真の武術の意義が存在する。術技を通じて、包容同化の精神如実に具現し得たとき、自他共に生存の実が生ずるので、神武の下に平和があり、平和の母体として武道が存在す。心身を鍛錬し、万難不屈の大丈夫を養い、祖国日本のため全身全霊を尽くすのみ」と言い表している。

次に、国井善弥について説明する。国井善弥は「昭和の今武蔵」と言われた無敵の武人だったが、本人は「武蔵なんかと一緒にするな」と実力・精神とも武蔵などとは比較にならないことを強調していた。事実、当時の名だたる武道家や大相撲の横綱だけではなくボクシングチャンピオンや拳銃相手にも果し合

いを申し込み無敗であった。日本武道の非実戦的スポーツ化や精神荒廃を憂いていた国井善弥は、東京滝野川の自分の道場には「道場破り歓迎」の看板を掲げ「他流試合勝手たるべきこと」を道場の掟としていた。第1次世界大戦に従軍した国井善弥は、白兵戦で超人的強さを発揮して陸軍戸山学校の近接戦闘術の開発と指導を任せられる。その後、日本陸軍の近接戦闘能力が際立って向上したことから陸軍戸山学校の宮庭に国井善弥の像が建立された。それが故に、大東亜戦争後の戦争裁判で戦犯扱いされ指名手配されていたにもかかわらず、国井善弥は、日本武道会を背負ってGHQと文部省の官僚らが見つめる中、海兵隊随一の格闘教官と果試合をした。経緯はこうである。終戦後、日本武道を軍国主義を支えたものと決めつけたGHQは武道全般を公の場で全面禁止とした。特に剣道は厳しく「軍国主義と因果関係がないことを証明しなければ許可しない」という。そのためには、「米側は実銃実銃剣で殺人可。対する日本側は竹刀で怪我をさせてはならない」という条件で勝利しなければならなかった。困惑した日本武道会は国会議員で小野派一刀流の宗家笹森順造を中心に人選をしていた。当時、日本武道会に挑戦状をたたきつけていた異端者の国井善弥に、本件を依頼するのは嫌だったものの、絶対に勝てるのは彼しかいない。そこで笹森氏が直接国井善弥に会って説明すると、ニヤッと笑った国井善弥は「断る? なんてそんなもったいないことをするのか」と答えた。実際の勝負は一瞬で決した。国井善弥の先手の位太刀の誘いにのった海兵隊員が直突から掌底の打撃を浴びせようとするところを、手の裡を返して霞に組み伏して地面に抑えた。レスリングのチャンピオンでもあった海兵隊員がびくとも動けず負けを認めた。国井善弥は、元の名を道之といい、武道の極意を開眼した後、善弥を名乗っていた。これによってGHQは本人が戦犯指名手配中の本人だとは気が付かなかった。何よりも本人が、そんなことは一向に気にかけていない。この一件からしばらくして、GHQは日本剣道の公での活動を許可することとなる。

俺は何事も、理屈や道理だけではだめだと思し、何かができたとしても筋が通ってないものはよくないと思う。文武両道とか文武不岐という言葉の意味は、実力と道義が一体でなくてはならないということだよ。強いだけど馬鹿だし、道理だけ言ってる奴はただのおしゃべりだ。あるいは、頭で分かったようなことを言っているにも実際にできないので、やっぱり分かっていないということだな。



国井善弥。

鹿島神流が立派だと思っるのは、先祖代々一貫した目的意識の中で生き通し、それを実践できる実力を養ってきたところだ。俺もそう在りたいと心から願う。だから、鹿島神流を自分の道にした。俺は楠正成の生まれ代りだと信じ、靖国の英霊の志を継承するのが俺だと決め、それにふさわしい俺になるように頑張ってきたし、今でも頑張っているよ。それができるかどうかなんてことを考えている暇があったら、そのために努力をすることだよ。どうやったらいいかなんてことで時間をつぶすくらいなら、まずはやってみて、どんどん修正していけばいい。何よりも、人に頼ってはいけぬ。自分の生き方ぐらい自分で責任をもって進む。全ての結果は次へのステップだ。人生全てが次の時代へのステップだ。大東亜戦争までは、そう信じて10歳代、20歳代の若者がにっこり笑って死んでいったよ。全身全霊で自分が正しいと思う生き方を行動で示して逝ったよ。それを継ぐ者がいることを信じて。俺はそれを継ぐ。一度や二度戦争で負けたぐらいでやめたりなんかしない。何度死んでもやり抜く。その気持ちを大切に、いただいた身体を鍛えに鍛え、働きに働いて心を全うする。俺はそうやって生きることにしてんだ。日本人を全うする。生涯日本の戦闘者を体現する。

幸い、自衛隊30年間とその後の10年間で同志を見つけることができたよ。そして、ここ熊野飛鳥の地に呼び寄せられて多くの仲間ができてきている。

驚いたことには、この地は、俺が武の道



陸軍戸山学校にあった国井善弥の銅像。

と決めた鹿島神流の御祭神「武甕槌神」の剣「節霊」が神武天皇に授けられたところだった。古事記、日本書紀には次のように記してある。熊野は、神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレヒコノミコト)後の神武天皇が上陸した地である。上陸するや否や熊野の神の毒気に当たり、皇軍全員気を失う。そこで、天照大神が武甕槌神の剣・節霊を熊野の高倉下(タカクラジ)に与え届けさせると、神倭伊

波礼毘古命と皇軍士卒が再び覚醒する。そして、熊野飛鳥で態勢を整えた皇軍は橿原にむけ進軍して、ついには大和建国の大業を成し遂げた。

現代は、まさにマネーの毒気に充てられた日本人が正気を失っている状況だよ。その毒気を洗い清め、日本人が再び覚醒することを期して、昨年、「熊野飛鳥むすびの里」をこの地に開設した。

俺は40年、武甕槌神の神武を鍛錬し「節霊」を磨いてきた。だから、「熊野飛鳥むすびの里」の武道場は「節霊武道場」といい、修学研修室は「士卒復元塾」と呼ぶことにした。ここでは、天下御治召し給う大御心に副い奉るの土を培い、日本文化を体頭できる真の日本人を育成している。

「熊野飛鳥むすびの里」では、日々、畑を耕し、休耕田を黄金色に輝く田んぼにせんと百姓仕事に精を出す。土地の人々と熊野の神々の御恩に感謝して、地に足の着いた日本人を実践する。ごさかしい理屈を抜きに、ここで暮らせば本物の日本人に成っていく。ちっぽけな活動体ではあるが、自らを八紘為宇の実践者として自覚し、大丈夫たらんと気構えだ。

同じような地域文化に生きる活動体が国内外に増えれば、「国際共生創成協会」の名のもと、共に自立した協力関係を創り、地域文化の実践生活と相互敬愛の大調和を通じて世界を正して行きたいと考えている。



私の演武。